

[研究会報告]

タンザニアにおける助産師教育アプリの評価

新福洋子¹⁾

1) 広島大学大学院医系科学研究科

要 旨

目的

開発途上国において、5歳以下の子どもの死亡は新生児期が約半数を占め、母親の妊娠期からの健康管理と出産準備が重要である。本研究では、先行研究で開発した妊娠期教材をスマートフォンのアプリに応用して、WHOのガイドラインを基に助産師の教材として新たに展開し、その実用可能性と学習効果を検証した。

方法

紙芝居教材をスワヒリ語で動画化し、新しいWHOの妊娠期・分娩期ケアのガイドラインと共に、なぜそれが重要なのか、助産師が日々のケアにどのように反映させることができるのかを、現地に即したイラストで説明したコンテンツを作成した。また、各コンテンツにはコメントや「いいね!」を付けるスペースを設け、助産師同士、また開発者とコミュニケーションを取れるようにした。タンザニアの助産師を対象に実装し、学習の継続をアプリからモニタリングし、内容の理解をクイズと女性を中心としたケア尺度で評価し、使用感についてフォーカス・グループ・ディスカッションを行った。

結果

24名の助産師がアプリをダウンロードして使用し、23名がミニクイズと女性中心のケアに関するアンケートに回答した。そのうち、21名(87.5%)が2ヶ月後も学習を継続し、15名(62.5%)が学習モジュールを完了した。ミニクイズ(それぞれ6.8点、8.4点)と女性中心のケアに関するアンケート(それぞれ98.6点、102.2点)では、アプリ使用前と使用後で平均点の上昇が見られた。また、うち21名の助産師を対象に実施したフォーカスグループディスカッションでは、アプリの特性は、使っている言葉、地域の食事に合わせた栄養指導など「わかりやすく、使いやすい」こと、国内外での双方向で即時的なコミュニケーションや、クイズといった「ゲーム感覚で楽しい」こと、妊娠期から分娩まで包括的であり、医療者と妊婦両方に安全を促す「内容の包括性」が評価された。アプリの効果として「知識を得られ、実践に役立つ」「自信がつき、能力が上がる」が挙げられた。またネット環境の整備の必要性や日常の業務の忙しさからアプリを見る時間が限られること、妊婦が指導内容を忘れてしまうこと、業務中にスマートフォンばかり見ていると思われぬ工夫が必要であることが語られた。

結論

開発した教材アプリは、助産師にとって実用可能であり、学習効果がある可能性が示された。アプリの使用環境の改善をした上で、提供されるケアの変化を調査する大規模研究が求められる。

キーワード：妊娠期教育、アプリ開発、m Health、助産師教育、タンザニア